

教え子の結婚式

佐々木 朗

「学校の先生になって一番良かったと思う？」って聞かれたら、おそらく「教え子の結婚式に行った時かな。」と答えるだろう。というわけで、私はこの連休に教え子の結婚式に行って、大いに楽しんできた。

1. それは「日高教育局ですが。」で始まった

私がこの大学を昭和 58 年に卒業して初めて勤めたのが、日高管内の静内町立御園小学校である。3月の25日頃、自宅に「日高教育局ですが、3月28日に浦河の日高教育局へ来ていただけますか。」と電話があった。「ええっ、日高！？」と心の中では思ったものの「わかりました。喜んで行かせていただきます。」と電話を置いた。日高はそれまで一度も行ったところのない場所であった。「日高＝馬」という程度の知識しかなかったが、お呼びがかかったからには行かなければならない。まずは、JRで浦河へ行くことになった。苫小牧で特急を降りて、日高線に乗り換える。今でこそ笑い話になるが、苫小牧から、勇払を抜け厚真に入るあたりは、人家も建物もほとんどない。大きな火力発電所があるだけである。私は本当に不安になった。「日高には人はいるの？」という気持ちである。その後の駅ではそれなりに家もあって、ちょっと安心して、やっと目的地の浦河到着である。今でも覚えている浦河の駅前。駅前が駅前でないのである。栄えていない。店がない。明るくない。そこに降り立った私は、またまた不安になった。これも笑い話であるが、浦河は、駅をはさんで、東側に本町、西側に堺町があり、両方はそこそこに街であるが、真ん中の駅だけは開発から取り残されたようにポツンとあるのであった。

宿に入って次の日の日高教育局。新卒の先生（になる人）ばかりである。50名位はいと記憶している。私は静内のグループに呼ばれた。5名の仲間であった。静内から迎えに来たどこかの校長先生の車で、静内の役場へ行った。やや街であって、不安の中にもほんのちょっとの安心があった。今でこそ静内でよかったなあと思うが、ほとんどの新卒はもっともっと僻地の学校へ赴任したのである。静内は人口が2万5千人で日高の中では一番の都会なのである。そこに御園の井上教頭先生が迎えに来て下さっていた。車で山へ向かうこと20分。街から13キロほど奥に入ったところが、私の初めて勤めた学校、静内町立御園小学校であった。

2. 荷物をまとめて赴任

右も左もわからない状態であったが、「よろしくお願いします。」と先生方に頭を下げて、その日は、赴任の日を確認して引き上げた。山の中の小さな木造の学校。学校の後ろには裏山がある。学校の周りは水田、そして放牧地。絵に描いたような田舎である。

函館に帰ったら、引越しの準備である。母が初めて家を離れる私のことをだいぶ心配して、生活に必要なものをそろえてくれた。私はそれはそれで準備にかかったが、アンテナを屋根から降ろしたり、無線機を梱包したりと忙しかった。赤帽の軽トラがあふれそうな位、そして屋根にはアンテナを積んで静内まで走ってもらった。私は、「ついていく」という母を乗せて、車で静内へ。

まだ、高速道路もなかった時代だったと思う。室蘭でようやく半分。日高に入って1時間半。やっと静内の町に入った。自分の足で回る静内は、まずまず店もあって、ちょっと安心した。さっそく無線でCQを出してみる。「CQ CQ CQ こちらはJH8CBH。」応答してくれたのは、私が赴任する学校の校区の方であった。後でわかったが、一年生に入学する息子さんがいたのだった。「無線をやっている先生が来る。しかもかなり詳しい先生らしい。」というのが電波で静内に飛び交うのはそう時間がかからなかった。なぜか、次の日にはもう教員住宅の屋根に無線のアンテナが上がっていたのだったから。

この無線仲間の何人かとは今でも静内に行くと思意にさせていただいているが、私の初めての一人暮らしの不安をどれだけ和らげてくれたか、そしてどれだけお世話になったか考えると感謝しきれないくらいである。

2、3日かけて部屋づくりをして母はJRで帰っていった。いよいよ私の一人暮らし、そして、教員生活の第一歩が始まったのである。

3．教員生活の第一歩

私の受け持った児童は小学校5年生。私が昭和35年生まれで、子ども達の多くは昭和47年生まれ。ともにネズミ年で、チューチューかけ回りながらの一年を過ごすことになる。男子8名女子12名の20名のまだ見ぬ子ども達。私は教頭先生から聞いた子ども達の様子を頭に描きながら、学級通信の第1号を書いた。「きかんしゃ」それは小学校1年生からずっとかわらず続いている学級通信の名前である。みんなを引っ張っていくということであろう。

始業式。不安なのは私ばかりではない。子ども達にとっても、第1学期の始業式は非常に不安なのである。なぜか、それは誰が担任になるかということである。それによって子ども達にとっても運命の日なのである。

ステージに立ちながら、担任発表の時を待った。子ども達も1年生は、2年生は、と選択肢が少なくなってくる中で、「もしかして、あの新米？」などと思いながら期待と不安が入り混じっていたのだろう。「5年生は佐々木朗先生です。」と校長先生から発表されたとき、私が見たのは子ども達の嬉しそうな表情であった(ように見えた。)

「子どもって何て素直でかわいいんだろう。教師って最高の職業だなあ。」と感激にしていたのは最初の何日かだけ。20名の子ども達は少しずつ本性を出し始め、戦いあり、感動あり、の一年が始まったのである。

4．子ども達と遊ぶこと

子ども達と遊ぶこと。これは40を過ぎた今でも大切にしていることである。手つなぎ鬼もできなくなったら終わりかなと思っている。遊びの中で、子ども達の見えなかったものが見えてくるし、第一子ども達と遊ぶのは、楽しい。体育館やグラウンドでの手つなぎ鬼。中庭でのかけっこ。裏山でのざりがに取り。休み時間も遊んだが、放課後も休日もいつも子ども達と遊んだことは自慢できる一つである。

私の教員住宅は、学校のすぐとなり、児童玄関から歩いて15秒のところである。休みの日には必ず子ども達は遊びに来た。もっとも一学年一クラスの単級で子ども達同士も全校がそれぞれの名前を知っている学校である。自分の受け持っている学年も、6年生も、小さい子も私の家に集まった。時にはすごく大きい子もいて、「何年生?」、「中学生」というのもあった。私は当時まだめずらしかったパソコンを持っていた。当時はまだプログラマーでいられたので、ゲームを作ったり、雑誌のゲームを入力したりして、子ども達がよく遊んでいた。

時には散らかした部屋を全部片付けさせたり、そのご褒美にと、材料を買ってきて、女子にご飯を作らせてみんなと一緒に食べたりもした。

私の家の中、学校の裏山、家の隣の保育所の前庭、小さな池、牧場の坂、全てが地域の遊び場であり、子ども達の文化の創造の場でもあった。

今でこそ、私は地域を離れて住んでいるし、学校の近くの教員住宅に住むのを避ける先生も多いが、私は、「学校のそばに先生が住んでいる」ということがどれだけ地域にとっていいことなのか、子ども達にとっても親にとっても安心できるかということを知ったような気がする。

5．先生の嫌いなものは?

5月に入り暖かくなった時、ある子が「先生の嫌いなものなあに?」と聞いてきた。「そうだねえ、先生は、虫があんまり好きじゃないなあ。蜘蛛なんか気持ち悪いねえ。」という話をした。事件の発端は休み時間であった。いつもは何人か教室に残っているが、その日に限って教室には誰も残っていない。みんな中庭やグラウンドへ行ったらしい。私はたまたま教室に残っていた。3時間目のチャイムが鳴って教室に戻ってきた子ども達が手に持っていたものは。バッタ、便所虫、蜘蛛、……。3時間目が授業にならなかったのは言うまでもない。

素直というか、はんかくさいというか、正に子ども達は直球勝負であった。田舎暮らしも長くなると、今でも蜘蛛はいやだけれど、子ども達が鍛えて(?)くれたせいか、だいぶ虫に対しての恐怖はなくなった。

6．アポイ

同窓会ですっかり大人になった5年生の仲間達と会うと必ず出るのがアポイの遠足。春

の遠足は、アポイ登山であった。様似町にあるアポイは小学校の登山遠足としてよく行く場所であった。そういえば、最近では登山遠足っていいのは聞いたことがない。子ども達にあまり無理をさせないっていうのと、事故が起こりやすいっていうのがあるのだろうか。この事件も今でこそ、懐かしい気持ちで話せるのであるが、当時は新米教師にとっての大きな試練であった

アポイはちょうど中腹に山小屋がある。高学年は一応頂上まで登ることになっているが、体力的にたいへんであれば山小屋で待っててもいいということであった。私達5年生も全員山小屋まではたどり着き休憩をした。「さあ、みんな行こう。」と言ったが、腰の重い子が随分たくさんいた。私は、この子なら大丈夫と思う子に、「がんばれば行けるよ。ここまで来たら、頂上に登って景色見なきゃ。」などと尻をたたいて、大部分の子を頂上へ向かわせた。しばらくすると、大きな木々はなくなり、背の低い高山植物が生えているだけの尾根であった。もうすぐと思いつつも頂上になかなか着けない。一番遅い子の後ろに着きながら、ゆっくりあがって行った。途中から私は少しずつ不安になった。「帰りのバスの集合時刻に間に合うかな。」と。でも頂上はもうすぐそこであった。連れて行った子を何とか頂上の看板にタッチさせ、すぐに下ろした。登山って登るよりも下の方がエネルギーがいる場合である。時間を気にしながら、私は子どもを励ましながら、山小屋へと下ろした。その時、山小屋で待っていた子が、「先生、K が落ちたー。」って大きな声で叫んだのを聞いた。私は一目散に駆け下りて、山小屋まで走った。汗だくになって駆け下りた私を見て、「先生、落ちたってのは嘘。先生遅いんだもの。」と言った。私はKが無事であることを確認して、その時、先生になって初めて子ども叩いた。それも結構強く。「世の中には言っている嘘と悪い嘘がある。」としかった。この言葉は、クラス会の度に出てきます。名言などとは思わないのだが、20年以上経っても、あの痛さと共にずっと覚えているのであれば、学ぶものもあったのかなと思う。

バスの発車時刻は迫っている。このままでは間に合わない時刻である。私は元気のある子ども達にまとまって下へ降りて、事情を教頭先生に話すよう伝え、疲れてバテている子と山小屋を後にした。

「先生、もう俺歩けない。」と言ったのはY君。今回の結婚式で、同じ部屋に泊まった子である。このままではバスを一時間位待たせることになる。私は、Yをおぶって、坂道を駆け下りた。22歳で若かったとは言え、よくぞあんなに力があつたものだと思つとちょっと体が熱くなる。バス直前でYを背中から降ろし、無事バスへゴールイン。日は少し傾きかけていたのを覚えている。おにぎり一つ食べさせる時間なく、無理に頂上へ登らせ、そしてスクールバスを1時間も待たせて、その後学校にもどって校長先生、教頭先生にしばられたのは言うまでもない。

でも、汗をだらだら流しながら、アポイの頂上の看板をさわってニコツとした子ども達の表情は今でも覚えているし、私に初めてたたかれて泣いた子ども達、バスに乗る直前に下ろしたYの「先生、ありがとう」という言葉は今でも鮮明に脳裏にある。

トラの雪像

日高はさほど雪が多くはない。しかし冷え込みは結構厳しい。そんな気候はスケートリンク作りに適している。日高でのスケートの思いは別な機会に譲るとして、今度の話は雪像作りの話である。

何となくまとまりがないまま3学期を迎えた。その日は朝から振った雪で、けっこう深雪が積もっていた。どんな経緯かは忘れたが、校庭に雪像を作ることになった。最初からトラのつもりだったかどうかわからなかったが、作っているうちに体長2.5メートルぐらいはあったと思うが大きなトラの雪像ができた。「色、つけよう。」ってことで、図工室から黄色と黒のポスターカラーを持ってきて、トラ模様に雪像に色をつけた。雪を運ぶ者、形を作る者、細かいところを作業する者、クラス全員の心が一つになって雪像を作った。午前中びっしりとかかって完成した、見事な雪像。校長先生もずっと職員室から真剣に雪像を作る子ども達、私の姿を見ていたであろうが、「教室に戻って勉強しなさい。」という言葉を我慢してずっと見守ってくれた。

黒く塗ったところがもちろんすぐ融けてしまった。でも、クラスが最高にまとまった瞬間でもあった。御園の小さな校庭に作った大きくそれはそれは見事にできた「トラの雪像」は今でも子ども達にとっても私にとってもはっきりと目の奥に写っている。

一年間の思い出

小さな思い出ではたくさんある。苦しいのも、悲しいのも、嬉しいのも。でも今大きくなって教え子達と再会すると、そのどれもが美しく輝いている。思い出って美しくなる。まさに実感としてわかる気がする。

いよいよ3月一年が終わろうとしている。それまでの6年生に代わって、5年生が主役となって運営する行事がある。「6年生を送る会」である。「何とか最後はうまくやりたい。」と思って休みを利用して札幌まで本を買いに行った。5年生の出し物は、「一年を振り返って」ということで、一年間の行事を振り返って、OHPあり、コントありで、まとめた。子ども達はとってもし生懸命やってくれた。教科書が終わるか終わらないかハラハラしながらも、随分と時間をかけたのを覚えている。

子ども達からは、6送会の話はあんまりでないけれども、一年の締めくくりを「先生、うまくいったね。」という声の中で終わらせることができたのは何よりだったと思っている。

20代を過ごした第二のふるさと「静内」

その2年後、御園小学校は廃校となり、4キロほど函館寄りに新設された桜丘小学校に統合された。その学校は当時としてはまだまだ珍しいコンピュータが20台も入っており、私がそんな関係の教育をポチポチ研究していたこともあって、5年ほどお世話になって、恵山町立東光中学校に転勤になった。8年の日高の生活。20代の大部分をすごした思い出多い第二の故郷であった。出発の日、地域の人みんなが私の教員住宅の前に集まって見送

りをしてくれた。涙でぐしゃぐしゃになりながら、静内を後にした。

教え子は二十歳になって。

静内を離れて、2年位経った時だったと思う。教え子達から「先生、クラス会やるよ。」と声がかかった。夏休み8月のお盆の時であった。私は二つ返事で「わかった。必ず行く。」と答えた。嬉しい、実に嬉しいものである。彼らが卒業してもしばらくは静内にいたので、たまに学校に遊びに来たり、家にも来たりしていたが、やはり中学生、高校生になると、先生のところに遊びに行くことは少なくなるようで、ちょっと疎遠になり、また、遠く離れてしまったこともあって、懐かしさがこみ上げてくる。

久しぶりに車を走らせる。静内の消防、目名の牧場の看板、田原の直線道路、よく出前を取った丸越食堂、そして、桜丘小学校、私の桜丘の教員住宅。ほとんど、変わらない。懐かしい。更に車を進める。ヌッカの坂を下りて、静内川に沿って走る。御園の街だ。佐藤商店、九笹組、郵便局、藤原商店。そのままである。そして、御園小学校。でも廃校になった御園小学校の後には、研修施設が建っていた。でも体育（彼らは「たいく」と言っていた）体育館は同じだ。トラの雪像を作った前庭も面影がある。もう何人か、グラウンドに集まって談笑している。「先生、良く来てくれたね。」もうすっかり大きくなった彼らで、もうすっかり大人になっている。お互いの気持ちが、十年前に戻るのにはそう時間がかからなかった。久しぶりに裏山に行ったり、グラウンドを走り回って遊んだ。遊んだ。遊んだ。勤めている子が来るのは夕方なので、それまで、何人かと夜食べるバーベキューの買出しに出かけた。今回花嫁になったJ子がてきぱきと買い物をして、すっかり幹事役をやってくれた。「お金、先生出してあげるね。」と言っても「もう私達も大人だからきちんと出すから」なんて嬉しいことを言ってくれる。

夕日が落ちる頃には、20名のうち13、4人は集まったと思う。テントを立てて、火を起こして、野菜を切って、肉を焼いて、キャンプファイヤーを囲みながら、食べた。飲んだ。歌った。笑った。キャンプファイヤーに照らされる二十歳の若者の顔はみんな輝いていた。夕食の後は、花火大会。花火もいっぱい買い込んだ。夏の夜、キャンプファイヤー。そして花火。気分はお互い最高潮である。その後も続いた。キャンプにはつき物の「肝試し」である。御園小から2キロぐらい更に山奥へ行ったところに農屋という集落があり、その丘に上ったところに、お墓がある。そこでやるというのだ。みんな自転車で、私の車に乗せて、走った。男女ペアで、キャーキャー言いながら、肝試しをした。怖くて手をつないでいた子もいたなあ。テントに戻ってきたのはもう真夜中だった。それでも、しゃべって、しゃべって、この瞬間がずっと続けばいいなあと思った。そして、夜は更けていった。朝食は女子がてきぱきと作ってくれた。みんなで食べて、半分眠たい目をこすりながらも、後始末をして、今度いつってという約束はしないで、「じゃあまたね。」「じゃあね、先生。」って別れた。

勤めているもの、牧場で一丁前にやっている者、大学生をやっているもの、まだ受験勉

強が続いている者、様々であった。面白いこと、楽しいこと、いやなこと、死にたいことがあるかもしれない。でもふるさとはみんなを優しく迎えてくれる。そして支え合う仲間もいる。ずっと、ずっと、いくつになっても、どこへ行っても、仲間。そして私は彼らの先生でいれる。先生になって本当に良かったと思った夜であった。

教え子の結婚式

その後しばらく子ども達に会うこともなかったが、ぼちらぼちらと子ども達から結婚式の招待状が届くようになった。子ども達は私には招待状をくれる。それだけで嬉しかった。できるだけ都合をつけて、結婚式には出るようにしている。結婚式で楽しいのは、花嫁や花婿になった子ども達を祝福するのもそうであるが、何と言っても同窓会である。アポイの話、トラの雪像の話、タイクの話、水道が凍った話、学芸会の買い物に行ってお飯を食べて帰ってきて親を心配させた話、内緒で札幌に遊びに行った話。いくら話しても尽きないくらい盛り上がる。すっかり大人になった彼らにビールを注ぎながら、最後は山奥まで車で送ってあげる。立場が逆といえば逆だが、これでいいと思う。まだあと何人か独身族が残っている。

今度はいつ招待状が来るかな。二世が生まれた話が届くかな。そんな便りをずっとずっと待っているのである。